

実践

1

中高生の秘密基地 in 文京区 ～誰もが当事者になる居場所作り～

認定 NPO 法人 カタリバ
シニアマネージャー 白田 好彦

① なんでもだいたいできる場所

東京都文京区。湯島天神と東京大学と旧岩崎邸庭園に挟まれた閑静な住宅街に突如現れる、小綺麗な建物「文京区教育センター」内の一角に、「中高生の秘密基地」が存在します。

利用できるのは、文京区在学・在住・在勤いずれかに当てはまる中高生。共通して行うのは、入退時に利用者カードを提示することのみ。あとの過ごし方は…利用者の思いのままです。

誰でもふらっと使えるキッチンでは、たこ焼きパーティーをする楽しそうな歓声が聞こえることもあれば、魚を焼いて食べる香ばしい香りがすることも。そんなキッチンと壁を隔てることなく続く談話スペースでは、中高生たちが机を組み合わせて、館内に飛ぶ無料Wi-Fiでネットサーフィンを楽しんだり、本棚から思い思いの本を手にとってみたり、みんなで学校の課題に取り組んだりしています。

中高生が思い思いに過ごすスペースと、スタッフが作業をするスペースは同じ部屋の中にあります。遮るのは、おなかの高さくらいのカウンターだけ。ふとした声掛けからスタッフと利用者の会話が始まります。「ねえねえ聞いてよ！今日さあ…」「○○○ちゃん～（スタッフの名前）……ちょっと、時間ある？」必然的にスタッフは、中高生の圧倒的な日常に巻き込まれていくのです。

ちょっと変わったスペースもあります。本棚の間に作られた出窓の向こう側には音楽ス

タジオが広がり、ひたすらにドラムをたたく中高生の目は真剣そのもの。また、教室1つ分強の大きさがあるホールでは、大きな鏡を使ってダンスの練習をする中高生や、セリフを読み合わせ、演劇の練習に熱中する中高生の姿があります。なお、この秘密基地は3階建てで、2階には主にバスケットボールができるプレイヤードと、自習ができる研修室、3階には卓球ができる軽運動室があります。一人で来ても、大学生や社会人のボランティアスタッフを相手に時間を過ごすことができます。

加えて、詳しくは後述しますが、中高生の多様なニーズに応えるべく、様々な分野を題材にしたイベントを実施しています。その数、年間200以上。「中高生の秘密基地」文京区青少年プラザ b-lab(以下、b-lab)は、いわば、なんでもだいたいできる場所なのです。

② 「ナナメの関係」と「本音の対話」

この b-lab を運営しているのが認定 NPO 法人カタリバであり、本施設を2015年4月開館当初より業務委託で運営してきました。弊団体は、どんな環境に生まれ育っても「未来は創り出せる」と信じられる社会を目指し、10代が持つ意欲と創造性を引き出すために2001年より活動しています。

「自分はダメな人間だと思ふことがある」72.5% (2011年『高校生の生活と意欲に関する調査報告書』国立青少年教育振興機構)、「自分が参加しても社会は変わらない」68.3%

(2011年『高校生の心と体に関する調査』財団法人一ツ橋文芸教育振興会)。この数字が示すのは、自己肯定感が低く意欲を持っていない中高生の姿です。不登校、引きこもり、教育格差の拡大、機会の不均等など、これからの社会の未来を担う中高生世代が抱える問題を解決するためにできることはなにか。弊団体がまず取り組んだのは、高校にキャリア学習の機会「カタリ場」を届けることでした。

大学生のボランティアスタッフが中心となって高校を訪問。高校生と話すなかで、「将来やりたい事」や「進路についての悩み」について語り合い、ボランティアスタッフ自身も「自身の高校時代の失敗談」や「今、熱心に取り組んでいる事」を自己開示していきます。高校生の本音を引き出すためのカギは、親や先生という「タテの関係」ではなく、友達という「ヨコの関係」でもない、「ナナメの関係」です。タテとヨコの関係が人として基盤を築く関係性だとすれば、ナナメの関係はそれらとは違った角度から社会の実相に触れさせる、意欲に火を灯す出会いです。先生でも、友達でもない、少し年上の先輩の本音に触れ、高校生たちはその思いに引っ張られるように少しずつ自分の思いを言葉にします。約2時間のプログラムの最後には、「本音の対話」を通して引き出された自分の思いを、今日からできる小さな行動として紙にしたため、スタッフと約束を結びます。

③ 家でも、学校でもない、第三の場所の価値

ずっと東京を中心に活動していた弊団体に、2011年の東日本大震災は大きな変化を与えました。津波で大変な被害にあった岩手県大槌町、宮城県女川町の子どもたちのために、なにかできることはないか。震災復興という大きな社会課題に対してアプローチすることになったのです。様々な方法を熟慮した

結果、家庭でも学校でもない、学習を基軸とした放課後の居場所「コラボスクール」を作ることになりました。当時の職員に話を聞いたところ、はじめは地域にとってよそ者であるゆえに難しさもあったものの、「何もかもが流されてしまった中で、子どものことを学校だけにお任せしている場合ではない」。地域の人たちとそんな思いを同じくして、少しずつ信頼関係を築き、子どもたちのためになることを積み重ねていったそうです。東北での実践は結果的に、放課後の居場所において、弊団体がキャリア学習プログラムで培ってきたノウハウ「ナナメの関係」と「本音の対話」が活用できることを示唆しました。本件をきっかけに、現在では b-lab をはじめとした居場所事業を、行政と協力しながら全国数か所で実施しております。

中高生にとって、家でも学校でもない居場所はとても重要です。言い換えれば、家や学校だけが子どもを育てるのには、限界があるのかもしれないかもしれません。共働き夫婦・ひとり親家庭が増えているうえに、思春期という心の変化を迎える時期である中高生においては、親に大事なことを話さないこともあります。学校教育に求められることはほとんど増える一方で、教員数は削減される傾向があり、世界的に見ても多忙な日本の教員が、すべてを把握し支えることは、さらに難しくなります。だからこそ、家庭でも学校でもない、第三の場所において、親には話しにくいかもしれない本音を受け止め、学校だけでは拾いきれない支援および機会提供を、中高生に対して行っていく必要があります。

④ 環境に隠れがちな、見えにくい葛藤

さて、話を b-lab に戻します。b-lab がある「文の京」文京区は、23区でも有数の文教地区であり、中学受験をする割合が40%を超え